
とある日常の幻想殺し

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある日常の幻想殺し

【Nコード】

N3064Y

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

これは学園都市のほのぼのとした日常を上条当麻を中心に描いたショートショートです。

一話につき二、三分で読めるので気が向いたらどうぞ。時期とかは急にとんだり戻ったりするかもしれません。感想などあれば書いていただきたいです。
月1クラスの不定期更新

#1（前書き）

軽い気持ちで読んでみて下さいなw

1

——ここは人口230万人を抱える「学園都市」
その名の通りあらゆる学校を集めて造られた都市だ。

この街の科学技術は外部より二、三十年進んでおりより快適な生活を送ることができる。

ここでは日々、生徒の超能力開発が行われており様々な能力を持った生徒が暮らしている。

例えばここに上条当麻という人間がいる。

この少年、学園都市の区分では最低である無能力者（レベル0）という判定を受けている。

無、と言っただけあつて能力は使えない。

そしてこの少年、不幸である。

「うわああああ！」

上条は朝9時頃の路地を走っている。

「くそっ、完全に遅刻じゃねーか！何でインデックスは起こしてく

れなかったんだ!？」

実は上条、生まれながらの不幸体質である。

今朝も目覚ましが壊れてしまい起きたのは学校の始業時刻だった。

上条の部屋に居候している純白シスター、インデックスによればどうやら彼の能力である「幻想殺し（イマジンプレイカ）」の影響らしい。

「幻想殺し」はあらゆる異能力、すなわち超能力や魔術などを打ち消してしまうもので、どうやらそれが彼の運や神様のご加護を打ち消してしまっているようだ。

結局上条は学校に着いたあと身長アンダー140のミニマム先生もといクラスの担任、月詠小萌にこっそり絞られた。

「しっかしカミヤんもほんま懲りへんね」

「うるせえ青髪ピアス！エセ関西弁で喋りやがって！」

上条に青髪ピアスと呼ばれた少年は上条のクラスメートである。

「なにを言うてかカミヤんは、これはエセ関西弁じゃなくてほんまの関西弁やで？」

否定する青髪ピアス。

「いや、エセ関西弁だね！なぜならお前はツッコミがなってないから！」

なおも追及する上条。

「なつ、ツツコミて！非科学的すぎるやろ！」

そこへ金髪グラサンの貴公子こと土御門元春が仲裁にはいる。

「まあまあ青髪ピアス、そのへんにしとくんだにや〜」

「いやいや土御門、これはカミヤんが！」

「俺のせいだよ!？」

ちなみにこの三人、クラスの三馬鹿^{デルタフオース}と呼ばれていたりする。

そんなこんなやってるうちに黒髪長髪で巨乳のおでこ美少女、吹寄
制理に制裁され小萌先生にお説教されたのは言うまでもない。

#1（後書き）

初回からインデックスが登場してないね、ごめんなさい。

今回は説明でかなり使ったけど次回からは説明が減るだろうし、のんびり書きます。

#2（前書き）

二話目にしてインデックス登場 W

#2

ぐうううううううううう。

午後の教室に鳴り響く謎の音。

実は上条の空腹によるものだ。

それは上条が朝から弁当を作っている時の話。

「ふう、やっとできたぞ鯖の味噌煮弁当」

そこにすかさず純白シスター、インデックスが現れる。

「とうまとつま、それちょっとだけ食べてもいいかな？」

「ん、ああ少しくらいならいいぞ」

失敗だった。

「じゃあ、いっただつきまーす！」

言うなりインデックスは弁当箱を持ち上げ口に流し込み始めた。

「ちょっとまでインデックス。一体お前はなにやっているんですか

「!?」

「へ?ほふはははべへひいつへいふはら」口に流し込みながら話すインデックス。

「何て言ってるか分かりませんよ、インデックスサン!？」

カラン。

音が響く。

「今日はお魚がおいしかったです、ごちそうさまでしたゲップ」上条は涙目で

「最後のゲップはわざとですよね!？」

「なんのことなのかわかんないよ？」

「てか弁当はどうするんだよっ!」

勿論、奨学金入金日前である上条家にはパンなんて買う金はない。

そして今は午前7時50分。

弁当を作り直す時間はない。

朝の通学路に上条の声が響く。

「不幸だあ~~~~~!!!!!!」

そんなこんなで昼抜きの上条は飢え死にしかけなのだ。

そこへ吹寄制理が通る。

「あれ、上条やけに元気がないわね？」

「あ…ああ、昼抜きだからな…」

少し考えると吹寄はポケットに手をつ込みカロリーメイドを取り出した。

「ほら上条、受け取りなさい」

上条の顔が輝く。

「ふふふ吹寄サン、それを下さいますのか！？」

若干口調がおかしな上条。若干引く吹寄。

「ま…まあ、余ってて要らないしあげるわよ」

「ありがとうございます！！」

言っなり上条はカロリーメイドにかぶりついたのだった。

その後上条が食中毒で病院に運ばれたことはまた別の話。

#2（後書き）

今回も短いすねw

馴れてきたら長いのも書いてみます

#3 - 1 (前書き)

今回は二話に分けることにしました。

3 - 1

平凡な高校生、上条当麻が街をブラブラしていると

「ちよつと待ちなさいよ！」

名門常磐台中学の制服に身を包んだ茶髪の中学生在が叫んできた。

「あー、なんだビリビリか」

「ビリビリいうな！」

即座に否定するビリビリ…もとい御坂美琴。

「今日こそはあんたを負かしてやるんだから覚悟しなさいよ！」
美琴は前髪から火花を散らしている。

「わかったわかったふわああ。」

「あんたはどんだけ興味ないのよ!!」

叫びながら美琴は前髪から雷撃の槍を飛ばす。

「ハイハイそこで幻想殺し」

上条の台詞と共に雷撃の槍は彼の右手で消されてしまう。

「毎回毎回わたしの攻撃を受け流して！何なのよ、あんたのそれは!!」

「だからこれは幻想殺しって言って、あらゆる異能の力を打ち消すんだってば」

答える上条だが、美琴は怒りで話が耳に入っていないようだ。

「そうだビリビリ、今日少し付き合えるか？」

「ふえ？」

波乱の幕開けだった。

それから一時間。

上条と美琴はスーパーに来ていた。

「……で、何でスーパーなわけ？」
美琴が訪ねる。

その顔は不満そうだ。

「いやあ、今日は卵が特売なんだがお一人様一パックまでさあ」と、卵を選びながら上条が言う。

「あんたどんだけお金無いのよ……」
あきれ美琴。

「仕方ないだろ、無能力者なんだから……」
落ち込みながら答える上条だった。

無事買い物（卵漁り）も済み、二人は上条の寮の前まで来ていた。

「じゃあわたしはこれで帰るわね」

そう言いながら美琴は上条に背をむけようとした。

「せっかくここまで来たんだからあがつてけよ、ビリビリ」

「だからビリビリいうなって、ってあんなに誘ってんの？」

美琴は上条の誘いに対して戸惑ってしまう。

「嫌ならいいけどさ」

美琴は慌てて

「あ…あんたがそこまで言うならのってあげてもいいわよ？」「じやあ交渉成立だな」

上条と美琴は寮の階段を上っていった。

#3 - 1 (後書き)

改めて読むと美琴がツンデレだなあ

#3 - 2 (前書き)

前話の続きです。

感想などあれば、出来れば書いていただきたいです。

3 - 2

結局、美琴は上条の部屋に上がることになったわけだが、そこには勿論インデックスもいる訳で、美琴とインデックスがいがみ合い始めてそろそろ三十分になろうとしていた。

「ちょっと短髪、それは私のお菓子なんだけどっ！」インデックスの膝の上で寝ていた三毛猫がインデックスが立ち上がったことによつて弾き飛ばされた。

「え、いやこれはあいつが出してくれたものなんだけど…」

（あの三毛猫、かわいそうね…）

三毛猫に同情する美琴だったりする。

「ちょっと…あれ？俺の居場所は？」

1人会話に入れてもらえない上条は争いのもとになったお菓子をつまみながら困惑していた。

結局上条は、美琴が帰ったあとにお菓子を勝手に出した罰として、頭をインデックスに噛みつかれたのだった。
食べ物の恨みは怖いものである。

「痛てて…」

インデックスに噛みつかれた頭を擦りながら晩御飯を作る上条。

今晩は親子丼にするつもりである。

買っておいた鶏肉を出そうと冷蔵庫に頭を突っ込む上条。

「あれ？鶏肉がない？」

こうなると犯人は1人しか居ないわけであるが、その人は料理をすることが出来ただろうか。

「インデックス…、もしかして鶏肉食べた？」

半ば諦めながら聞く上条。

「お肉ならお昼に食べたよ、とうま。それがどうかしたの？」

返事は大体予想出来るのだが、念のため聞いてみる上条。

「まさかインデックス、調理しないで食べた訳じゃないよな？」

「え、なんのこと？」

上条の予想通りの答えを返してくるインデックス。

流石、四次元胃袋を持つインデックス。
ブラックホール

尋常じゃない健康体である。

「まさか鶏肉を生で食べて元気とは…」

自分で聞いておいて驚きを隠せない上条であるが、普通、生で鶏肉を食べて無事なはずがない。

「てかインデックス、お前が鶏肉を食べた事によって必然的に玉子丼になるんだがそれでいいか？」

上条は少しショックを受けながらインデックスに許可を求める。

「お…お肉は！？」大ショックを受けるインデックス。

「いや、お前が食べたんだから我慢してくれよ…」

「むー、じゃあそれでいいかも」

何故か上から目線のインデックスであった。

その日の晩御飯は結局玉子丼だった。

上条はその日に限って玉子丼が少し苦かった気がした。

#3 - 2 (後書き)

まだまだ文章が拙くて申し訳ありませんw

応援よろしく願いいたします。

#4（前書き）

今回は短めですかねw

読んでくれている皆様に感謝です

4

朝、目覚まし時計が鳴らなかった。
結果、上条は今日も遅刻した。

「はあ、不幸だ…」
登校早々、そんなことを呟く上条である。

昼休み

上条の横から黒髪ロングの地味な少女が近づいてきた。
「どうしたの」
声をかけてきた少女―姫神秋沙は三沢塾事件の時に上条が助けた、
『吸血殺し（ディーブブラッド）』という、吸血鬼を軽々と滅ぼせる力を持つ少女だ。

ちなみにその能力の制御は自身では出来ないため、イギリス清教御用達のケルト十字を身に付けることで、力を抑えている。

「朝から遅刻するし弁当忘れるしで今日も不幸だなあと…」
そんな境遇の姫神の質問に答える上条。

「それは残念。弁当なら分けてあげないこともない」
上条が姫神の台詞に反応して飛び上がる。

「マジか！？ありがとう姫神！」

しかし弁当をタダで分けるほど甘くはない姫神である。

「なら明日ジューズを一本奢ること」

上条が固まる。

姫神は表情を変えない。

じい――

「分かった、分かったから弁当を分けて下さい！」

「交渉成立」

少し口もとを緩ませる姫神であった。

その後、上条は姫神から貰ったご飯とハンバーグ（4分の1）をきれいに平らげ、なんとか一日を乗り切ることが出来たのだった。

ちなみに次の日、姫神から要求されたジュースは千円もする果汁100%の高級ジュースだったことは秘密である。

#4（後書き）

姫神登場！

原作では不憫なヒロインですね。

この作品ではレギュラーキャラとして扱っていいところかと。

#5（前書き）

季節は変わりました

5

季節は冬である。

上条当麻は自分の部屋で凍え死にかけていた。

「うわあああ！何でこんな時期にエアコンが壊れるんですか！？」

インデックスがきょとんとした顔で

「私は寒くないよとうま？」

「そりゃあお前がバカだからだろっ！うゝ、寒っ。」

凍えながらインデックスに応える上条であるが、その返事がインデックスの怒りをもってしていることには気付かない。

「ちょっととうま？バカってどういうことなのかな？」

気が付くと上条の背後には音もなく忍び寄ったインデックスが立っている。

「そ…それはものの例えと言っやつで！」

身震いしながら後退りする上条。

眼を光らせ詰め寄っていくインデックス。

上条の背中が壁に当たった。

ドン！

それをスタートの合図にするかのようにインデックスが上条の頭にかぶりつく。

少女の怒声と少年の悲痛な叫び声が静かに雪が降る学園都市に響いた。

上条はとにかくエアコンを買い替えるべく近所の電器店に来ていた。

「予算は30,000円つと。これだけあれば何が買えるんだろうなあ…」と呟きながら限界まで安いエアコンを探す。

上条が四万円クラスの機種を値切ろうと考えているととんでもないやつに声を掛けられた。

「あれ、カミヤんじゃないかにゃ〜」

上条が振り向くと立っていたのは、案の定クラスメートの土御門元春だった。

「なんだ土御門か…」

上条は素でがっかりする。

その反応を見た土御門が

「カミヤん、そんな事言ってる俺から中古エアコンプレゼントがなくなるぜい？」と、無責任な台詞を言い放った。

ピクリ

その言葉に反応したのは上条の耳だ。

「土御門、今なんて言った？」

「だから中古エアコンプレゼントって言ってるじゃないかにや〜」

「ホントか、土御門！」

「まあ嘘なんだがにや〜」

ミシリ。と音がした。

土御門は恐ろしい力で上条に肩を掴まれたためだ。

「え、あれカミヤん、なにするんだにや〜？」

「土御門さ〜ん…」

何故か『幻想殺し』上条の周りにどす黒いオーラが渦巻いている気がする。

「は…はいだにや〜…」

土御門はそんな雰囲気気圧されつい返事をしてしまう。

「今から『幻想殺し』の恐ろしさ、思い知らせてやりますよ……」

結局、29,800円の中古エアコンを買うことにした上条であったが二日もしないうちに壊れたことは上条家以外の誰も知らない。

#5（後書き）

またまたつまらない小説をお読み頂きありがとうございます。

ただ今、合作者を募集しています。

こんな僕に付き合っ
て頂けるような方いらっ
しゃいましたらメッセ
ージをお願いします

番外編へ一方通行#1 へ（前書き）

番外編。

一方通行の話なんです、もうダメです、死にたいです。

番外編〈一方通行#1〉

学園都市のとある裏路地。

スキルアウトすらない場所に足音が響く。

華奢な体つきで白い髪をした赤い眼の少年。

首にはチョーカー型の電極がつけられている。

彼は一方通行アクセラレータと呼ばれている。

学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の、更に『頂点』に立つ少年。

コンビニ帰りの彼が提げているビニール袋には同じ銘柄の缶コーヒ
ーが十本以上入っている。

そのまま彼は薄暗い路地を歩いていった。

別の路地での話。

何人かのスキルアウトが一人の少年にたかっている。

「さつさと金出せよ、オラ！」

「少しぐらいは持つてんだろ？」

「うう……」

怯える少年。

そこに白い影がスキルアウト達を押し退けて割り込んでくる。

「お前ら面白れエコトしてンじゃねエか。俺も混ぜてクンない？」
一方通行だ。

「ああ？おめえ何者だ？」
スキルアウトが問い掛ける。

「ただの悪党だ、三下。いや五下くれエが丁度イイか」
挑発的な発言をする一方通行。

スキルアウトの一人がキレた。
「テメエふざけたこと抜かしてンじゃねーよ！」

一方通行に右手を振り上げ殴りかかる。

その行動に対して一方通行は首のチョーカー型電極に少し触れただけだ。

一方通行の顔面にスキルアウトの拳がめり込む。
めり込んだ筈だった。

「うがああああああ！！」

叫んだのは殴りかかったスキルアウトだ。

その右手は関節が外れたのか下にだらりと下がっている。

襲われていた少年が呟く。

「一方通行……………」

「当たり前。俺が一方通行だ」

面倒臭そうな顔をする一方通行。

スキルアウトたちの顔に浮かぶ驚愕。

「一方通行だと！？」

スキルアウトの一人が一方通行に対して言う。

「何でそんな化け物が居るんだよ！」

化け物呼ばわりされて少しうんざりしたのか、

「んでまだヤンのか？」

スキルアウト達に逃げるチャンスを与える。

「くそっ！覚えてろよ！」

一方通行を捨て台詞を吐いて走り去っていくスキルアウト達を無視して去っていく。

「あの…ありがとう」

少年は助けてもらった礼を言う。

一方通行は少年に背を向けたまま言う。

「クソったれな悪党に礼なンて要らねエよ」

少年はその台詞に一方通行の信念があるように感じた。

番外編〈一方通行#1〉（後書き）

一方通行の台詞がこんなに難しいとは……。……。
結局、日常を描いて無いですからね……。

一方通行にとってはこれが日常なのかもしれませんが。

引き続き、感想・アイデア・合作者募集！

番外編〈浜面仕上#1〉（前書き）

また短いですがSSですもんね、気にしない気にしない

番外編〈浜面仕上 #1〉

スキルアウト
武装無能力者集団

能力の開発につまずいた無能力者（レベル0）の集まり——いい
わる不良だ。

中には拳銃などを持ったグループもある。

そんなスキルアウトのリーダーだった、学園都市暗部組織の下働き
浜面仕上は現在、学園都市の裏路地を潜りに潜った隙間みたいなと
ころにある超マイナー映画館にいた。

勿論、『アイテム』の一員、絹旗最愛と一緒に。

「何で俺はまたこんなところに来てんだ？」

自分の意思で来たわけではなく、半ば絹旗に引きずられるようにし
て連れてこられた浜面なのでこんな事を言う。

「全く、浜面は所詮、超浜面ですね。前と同じで私の外観を補強す
る要素に決まってるでしょう」

絹旗最愛の趣味は映画鑑賞、それも超B級の。

今回、絹旗が見に来たのはR15指定の映画だ。

彼女は中学生であるため普通に來ただけでは観ることが出来ない。
なので浜面に身分証明書を偽造してもらい、更に浜面に付いてきて
もらうことで単にちっちゃい高校生という『設定』にしたい訳だ。

一応、浜面も暗部の下働きなので身分証の偽造なんて簡単だ。

「いやいや、また15禁じゃん……」

ちなみに前回観に来たものもR15だった。

「ふつ。やはり浜面は所詮、超浜面ですね。B、C級映画鑑賞マニアの心理が超わかってないですね」

チケットを買いながら浜面を罵倒する絹旗。

「わかんなくていーんだ、そんなもん」

ホントにその通りである。

しかし浜面は所詮、超浜面
買ったチケットを絹旗から受け取る。

「あつ」

浜面が間抜けな声を出した。チケットが彼の手から離れていく。

チケットはそのまま――

溝に綺麗に入っっていた。

「ちょ、浜面！？どーするんですか！？私の映画鑑賞タイムが！！」
しかし浜面は落ち着いている。

「大丈夫だ、絹旗。普通に取れば……」

浜面は手を伸ばすが届かない――というか溝の蓋が邪魔で手首から
先が入らない。

十分程たつても取り出せない浜面。

「超仕方無いですね…」

絹旗が『オフエンスアーマー室素装甲』を使い溝の蓋を取り外す。

浜面は思いつ切り手を伸ばす。

「よし、取れたぞ」

「浜面、超急ぎますよ!」

ダッシュで入場口に行く絹旗。

十数秒後

絹旗は膝から崩れ落ちていた。

「ま…まさか上映時間を超過していたとは…」

その後絹旗にボコボコにされた浜面であった。

番外編〈浜面仕上#1〉（後書き）

意外に見てくれる人が多かったこの作品なので頑張って書きますね
）。

6 - 1 (前書き)

今回はなかなか上条さんが大変です。

久々の登場の上条当麻である。

しかし残念ながら今日の上条はとてつもなく不幸であった。

朝、ユニットバスで目覚めたらなぜか水浸しで全身びしょびしょになっており、取り敢えず朝御飯と弁当を作ろうとすると冷蔵庫のコンセントが抜けており、それを開けると、中のものは全て腐っていたりした。

しかしまだ不幸は続く。

上条の財布の中には五百円玉がなく、それでコンビニでパンを買って帰ると全てインデックスに食べ尽くされ、上条の朝食と昼食は抜きである。

しかも通学バスには乗り遅れ、学校まで走らされる羽目になった。勿論、遅刻確定である。

結局、上条が学校に着いたのは九時を回ってからだ。

しかも教室に入ると、青髪ピアスと土御門が仕掛けていた黒板消しが頭の上に降ってきて、ツンツン頭が白く染る。

忘れてならないのは小萌先生によるお説教。

すっかり二時間絞られ、ようやく開放されたのは11時を回ってからだ。

ここまでで怒涛の八連鎖の不幸現象。

しかしまだ終わらない。

昼休みに空腹を誤魔化すために寝ていたら、次は移動教室だったのか教室には誰も居ない。

勿論、五時間目にも遅刻しました。

しかし神様は上条を見捨てたのか、更なる不幸が襲いかかる。
まあ、それは次回に置いておこう。

6 - 1 (後書き)

えつとですね、(祝) 1000ユニーク突破!!
ついでにPV5000突破です!!

これもひとえに皆様のお陰でございます。

感謝感謝。

宣伝ですが、僕の新作、『とある科学の雷光共鳴』 完成しました。
気が向けばご一読下さいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3064y/>

とある日常の幻想殺し

2011年11月21日10時36分発行